漢字学習のあり方に関する学習者の問題意識調査(1)

清水　百合

要　旨

本稿では、学習者の自己評価から学習者が漢字学習のどのような点に問題意識を持っているかを探ってみた。まずアンケートで学習者に漢字学習に関する質問や個々の漢字の難易度を答えさせ、その回答を分析して、学習者の主観的な立場からの問題点を明らかにし、さらにそれが教師の考える問題点の仮説とどう違うのかをみた。効率よい漢字学習のために、教師側の問題意識の妥当性の確認と学習者側の自立学習に欠かせない問題意識の所在を明確にしようというわけである。

〔キーワード〕自立学習、問題意識、学習者の自己評価、教師の仮説

Learners' Views on Problems in Kanji Study (1)

Shimizu, Yuri

What the teacher perceives as the learner's difficulty in Kanji study does not always correspond with what the learner feels his/her problem is. To promote self-study in Kanji study, grasping learners' views would be necessary for the classes where the learners who are from the countries where Kanji is used mixed with the learners who are from the countries where Kanji in not used. Through analysis of the tests and the questionnaires different attitudes among the learners towards problems are clarified.

1．はじめに

日本語教育においては、学習者数が増加を続けており、その学習目的も多様化している。異なった目的を持った学習者がそれぞれの目的を達成するためには、必要な日本語運用能力を短期間に効率よく習得するのが望ましいが、それは同時に学習の個別化、学習者の自立化を促すことにもなる。特に漢字学習においては、その自学自習が学習者にゆだねられることが多い。

効率よい漢字学習を目指すためには、教師による総合的、体系的学習項目の選定や学習者に合ったカリキュラム作成が必要であろう。同時に学習者自身による自己の学習の客観的把握[1)] と目的意識の伴った継続的な努力が不可欠であると思われる。

そこでどのようにすれば、学習者による自己の学習状況の客観視が、可能かを探るために調査を行った。

2．調査の概要

2．1　被調査者の内訳

筑波大学留学生センターの日本語学習者60名、明治大学の日本語学習者16名、法政大学の日本語学習者49名である。母国別のグループ分けでは、中国・台湾が69名、韓国が27名、アジア諸国が21名、アジア以外の国々が８名であった（表－２参照）。

2．2　調査内容

本調査は以下の２つの部分からなる。

［１］学習者の漢字力を測るテスト（四肢選択　30問　30点満点）

［２］学習者の漢字学習意識調査アンケート

①日本語学習歴

②漢字の自学自習は可能か、不可能か。その理由。

③a.母国語で読むのが好きか。　b.母国語で書くのが好きか。

c.母国語で読むのが速いか。　d.母国語で書くのが速いか。

④a.日本語で読むのが好きか。　b.日本語で書くのが好きか。

c.日本語で読むのが速いか。　d.日本語で書くのが速いか。

⑤日本語で何が読みたいか、書きたいか。

⑥例文（５文）中の漢字について、その読み、書き、意味、用法のどれがなぜ難しいか。

アンケート調査の①については、どのようなの学習歴の学習者であるかを知るための基礎資料として、また②については自学自習は可能か否かを問い、その回答の差異がその他の回答にどのような影響があるかを調べた。③④については、学習者が日本語の読み書きに対して、どのような印象を持っているか、その日本語に対する印象は、母国語に対する印象と差があるのかということを、具体的には「好きか」「速いか」とたずねることによって探った。日本語の読み書きのどの部分に

不安を感じているかという情意的な部分の自己判定が表現されると考えたからである。③④の調査内容は表－１のとおりである。

表－１　アンケート③④の調査内容

		得意面	技能面
母国語	読み	③　a	③　c
	書き	③　b	③　d
日本語	読み	④　a	④　c
	書き	④　b	④　d

項目③は、母国語について、a.b.で情意面における差が、c. d. で技能面における差があるかを検討し、その差が日本語特有の漢字学習意識であるかどうか特定するための基礎調査である。項目④は、本論で目的とする日本語について調べる。これもa.b.で情意面における差が、c. d. で技能面における差があるかを検討する。さらに項目③で得られたデータをもとに日本語のみに言える事実はあるのか、あるいは言語行動そのもので、特に日本語学習と限られたことではないのかを考察する際に参考にする。

［１］は学習者の技能的事実を明らかにするために実施した。一方［２］はテストだけでは得られない事実（漢字に対する興味、印象、自己の知識に関するモニター能力）について明らかにするために実施し、両者を相互比較することにより、学習特性を明らかにする。

被調査者は、次の２つのやり方で分けられた。得点の分布を見るために総得点を５点ごと６つのグループに分けるやり方と、もう一つは上位と下位の差を見るために上位14名（11.9％）と下位13名（11％）を選ぶやり方である。

アンケートの回答については、学習者がよく知っている言語で自由に書いてもらうために、簡体字（中国語版）、繁体字（中国語版）、英語版、日本語版の４種を用意した。

３．調査の結果と分析

３．１　被調査者の母国と漢字力テストの結果

本調査では、学習者による自己評価の分析を主たる目的としている。その分析に使われる客観的データとしては、学習者の「母国」と「漢字力テストの結果」の２つがある。

表－２を見るとわかるように「母国」は、前述のように「中国・台湾」が69名、「韓国」が27名、「アジア」が21名、「アジア以外」が８名の４つのグループに分けられる。「韓国」と「アジア」を「中国・台湾」とは別のグループにしたのは、現在、母国での漢字学習環境が異なり、この３つの

表－2　母国別　漢字力テストの得点分布　　人数（%）

母国別		中国・台湾	韓　国	アジア	アジア以外	
点数別	30～26	10（ 8.0%）	13（10.4%）	1（ 0.8%）	0（ 0.0%）	24（19.2%）
	25～21	35（28.0%）	9（ 7.2%）	9（ 7.2%）	1（ 0.8%）	54（43.2%）
	20～16	14（11.2%）	3（ 2.4%）	3（ 3.2%）	2（ 1.6%）	22（17.6%）
	15～11	10（ 8.0%）	2（ 1.6%）	5（ 4.0%）	2（ 1.6%）	19（15.2%）
	10～ 6	0（ 0.0%）	0（ 0.0%）	2（ 1.6%）	3（ 3.2%）	5（ 4.0%）
	5～ 0	0（ 0.0%）	0（ 0.0%）	1（ 0.8%）	0（ 0.0%）	1（ 0.8%）
		69（55.2%）	27（21.6%）	21（16.8%）	8（ 6.4%）	125（100.0%）

グループを同じ漢字圏学習者と見なすのは適当でないと判断したためである。「アジア」についても、詳しく見ていけば中国系か否かで環境が異なったりするなど、その差異は個人の生活レベルにまで達する。だからここでは「中国・台湾」や「韓国」とは異なるものの漢字学習環境が求められる環境という意味で「アジア」とした。

「漢字力テスト」は、回答者全員にアンケートに答える前に実施した。問題は30問で四肢選択である。このテストは、筑波大学留学生センターのプレースメントテスト（文法、聴解、読解、語彙、文字の５つに分かれている）のうちの一つ、「文字」をそのまま使った。これは実際プレースメントテストとして使われているその実績から、学習者のレベル分けに妥当だと判断したからである。問題としては、類義の区別、同音異義、濁点の有無、音読みか訓読みかなどを問うものである。得点は、「中国・台湾」と「韓国」は、21点以上の得点者数が多く、「アジア」は21～25点に多い。

日本語学習者に関するデータの収集では、「中国・台湾」以外のデータ収集が困難で、今回も母国別のアンバランスは大きい。しかし併せて行った漢字力を測るテストでは、その得点数配分が母国別のアンバランスとは異なり、学習者数に比較的比例した分布を見せたので、分析を母国別と得点別の２軸をもって行うことにした。

「アジア以外」については、特に「中国・台湾」と比較してみたいところではあるが、回答数がわずか８名であり、個体差が出すぎる可能性があるので、今回の分析からは除外した。分析対象人数は、117名となった。

３．２　漢字は自習できると思うか

学習者に、漢字は「自習できる」と思っているか、「自習できない」と思っているかについてを聞いてみた。答えは、まず「はい」か「いいえ」に○をつけ、加えてそう考える理由も書いてもらった。

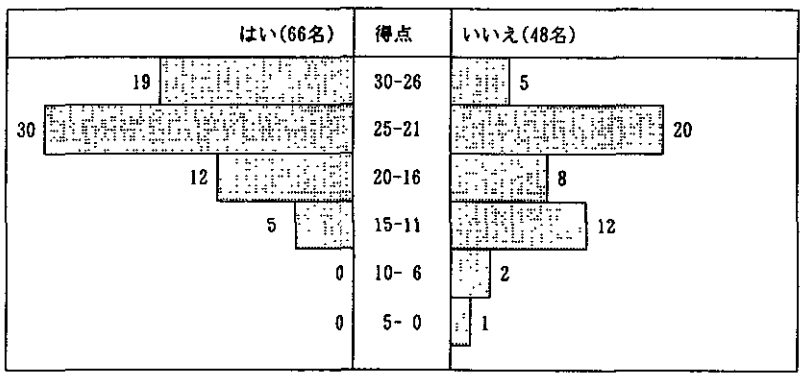
調査を行う前の仮説としては、次のような２点が挙げられた。

①低得点者グループは「自習できない」と答える傾向にある。

②「中国・台湾」「韓国」は「自習できる」と答える者が多い。

全体としては、3対2に近い割合（66対48）で「自習できる」とした者が多かった（図－1参照）。仮説①については、漢字力テストの得点数が14点以下の学習者（13名）を、15点以上の学習者と比べると「自習できない」と答える傾向があると言える。しかし仮説②の観点から再びこのグループをみると、「中国・台湾」（3名）、「韓国」（1名）でも「自習できない」と考えている学習者がおり、必ずしも「中国・台湾」「韓国」は「自習できる」と答える者が多いとは言えない（表－2参照）。

特に「中国・台湾」の学習者は、「自習できる」と答えたグループ（上位4名、下位2名）にも「自習できない」と答えたグループ（上位3名、下位3名）にも等しく分散しており（表－3参照）、「中国・台湾」の中では、漢字力に関係なく「自習の可否」について対立した意見を持っていることがわかった。「韓国」では、仮説のとおり「自習できる」と答えた者が多かった。これは一因として辞書が充実していることが挙げられる。



図－1　「自習できるか」という問いに対しての回答分布

表－3「自習できるか」についての回答の
漢字力テスト別の母国分布

上位14名(11.9%)		下位13名(11.1%)	
できる	できない	できる	できない
韓国　8名 中・台4名 (10.2%)	中・台2名 (1.7%)	中・台1名 アジア1名 (3.4%)	アジア5名 中・台3名 韓国　1名 (7.6%)

3．3　「読み」「書き」に対する自己評価

ここで言う「読み」「書き」とは、単に漢字の読み書きにとどまらず、ある長さの文を読んだり書いたりすることである。具体的な質問は次の8問で、「好き、嫌い」「速い、遅い」を5段階評価で答えてもらった。

1.a.母国語で読むのが好きか。　b.母国語で書くのが好きか。
　c.母国語で読むのが速いか。　d.母国語で書くのが速いか。
2.a.日本語で読むのが好きか。　b.日本語で書くのが好きか。
　c.日本語で読むのが速いか。　d.日本語で書くのが速いか。

これらの質問に対する答えは、教師が行ったテストのような客観的評価とは別に、学習者自身が「読み」「書き」に対して何が易しく、何が難しいと考えているかを探るためのものである。漢字一つ一つのレベルだけではなく、もっとグローバルなスケールで、「読み」「書き」に対してのイメージが母国語と日本語では違うのか、読みと書きでは違うのか、好き嫌いの度合と速さの度合についてはどう考えているのかを調べ、それが漢字学習に対する自己評価にどんな影響を与えているかをみた。仮説は次のようなものである。

①「中・台」は、「読み」の問題が少ない。

②母国語の「読み」「書き」の好きな者は日本語の「読み」「書き」も好きである。

③「読み」「書き」の速度に対する自己評価は、学習者の実力の客観的な評価に近い。

3．3．1　「読み」について

表－4と表－5を比べると、母国語での「読み」が好きと答えた者と日本語での「読み」が好きと答えた者では、90対79と母国語での「読み」の方が好きな者が多い。

仮説①については、日本語での「読み」について好きと答えた者が79名であるのに対し、嫌いと答えた者は10名いる。嫌いと答えた者の国別内訳は、「中国・台湾」が7名（69名中）、「韓国」が2名（27名中）、「アジア」が1名（21名中）でそれぞれ約一割で、問題が少ないと言える。

しかし「読み」の速度で問題度を測る（表－5参照）とその差は大きい。母国語での「読み」が速いと答えた者が92名であるのに対し、日本語での「読み」が速いと答えた者はわずか29名である。その国別の人数と得点の平均点は図－2のとおりである。

「韓国」と「アジア」については、得点別にみると速い・普通・遅いでは3点から1点の差があり、学習者の日本語での漢字力が自己評価に影響していることがわかる。しかし「中国・台湾」では、速い・普通・遅いの間に得点平均の差はない。「中国・台湾」の学習者にとっては、日本語での「読み」の速度についての自己評価は、漢字力テストの結果とは異なる基準を持っているのではないだろうか。

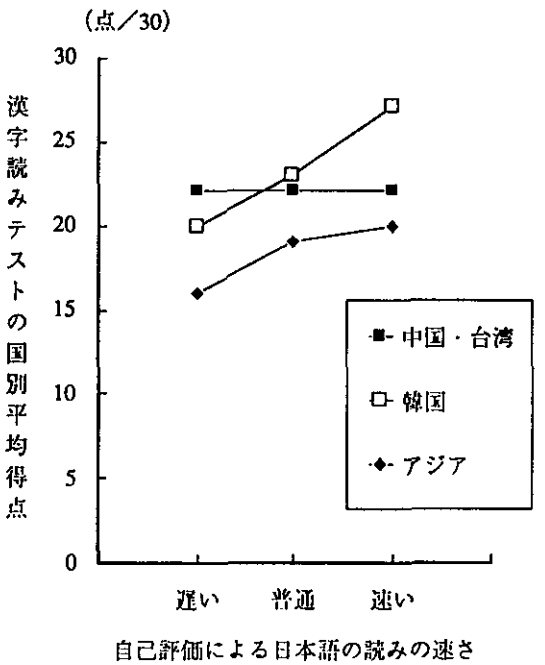
仮説②については、母国語の「読み」と日本語の「読み」と両方とも好きと答えた者が63名で、約半数が好きと答えている。また仮説③については、母国語と日本語との速度に差をつけて回答し

表－4　母国語の読み書きの好き嫌いと漢字力テストの平均の分布

		母国語で書くのが好きか			
		好き	普通	嫌い	
母国語で読むのが好きか	好き	66 56.4%	13 11.1%	11 9.4%	90(21点) 76.9%
	普通	3 2.5%	17 14.5%	0 0.0%	20(23点) 17.1%
	嫌い	1 0.8%	1 0.8%	5 4.2%	7(16点) 5.8%
		70 (21点) 59.8%	31 (22点) 26.5点	16 (20点) 13.6%	

表－5　日本語の読み書きの好き嫌いと漢字力テストの平均の分布

		母国語で書くのが好きか			
		好き	普通	嫌い	
母国語で読むのが好きか	好き	45 38.5%	23 19.6%	11 9.4%	79(22点) 67.5%
	普通	6 5.1%	15 12.8%	6 5.1%	27(20点) 23.1%
	嫌い	0 0.0%	0 0.0%	10 8.5%	10(20点) 8.5%
		51 (20点) 43.6%	38 (23点) 32.5%	27 (20点) 23.1%	



図－2　日本語の読みの速度の自己評価群の平均点

た者が96名と多い。

3．3．2　「書き」について

表－6と表－7を比べると、母国語での「書き」が好きと答えた者と日本語での「書き」が好きと答えた者では、数の違いこそあれやはり71対50と母国語での「書き」の方が好きな者が多い。

仮説①については、日本語での「書き」について好きと答えた者が51名と半数以下であり、また嫌いとはっきり答えた者が27名と23％になる。「書き」にはかなり問題意識を持っていることがわかる。

これは「書き」の速度で問題度を測る（表－7参照）と、その差がさらに開く。母国語での「書き」が速いと答えた者が80名であるのに対し、日本語での「書き」が速いと答えた者はわずか13名である。これは逆に日本語での「書き」が遅いと答えた者が、69名と半数以上であることからも裏付けられる。これら日本語での「書き」についての回答者を国別の人数とその者達の漢字力テストの平均点は次のとおりである。

「韓国」と「アジア」については、得点別にみると速い・普通と遅いでは4点から5点の差があり、学習者の日本語の漢字力が自己評価に影響していることがわかる。しかし「中国・台湾」では、速い・普通・遅いの間の得点平均の差は、普通が他より2点高く、速いと遅いでは同じ21点である。「中国・台湾」の学習者にとって、日本語での「書き」の速度についての自己評価は、「読み」の自己評価と同じく漢字力テストの結果とは異なる基準を持っていると思われる。

4．終わりに

本稿では、漢字学習者の自立学習はどうやったら可能かを考える一助として、学習者にアンケート調査をし、その結果を分析した。分析の結果明らかになったことは、アンケート以前に立てた仮説とはずいぶん異なるものが多かった。

例えば、自習について「中国・台湾」グループでは、自習できるとした者と自習できないとした者が日本語の漢字力テストの得点数が上位群も下位群でも、2名から4名いた。「ある程度のレベルに達している漢字圏学習者には、ことさら漢字学習について指導することはない」という教師の仮説とは異なった回答であった。これは学習レベルに関係なく、また漢字圏非漢字圏の別なく日本語の漢字学習についての指導が求められているということではないだろうか。

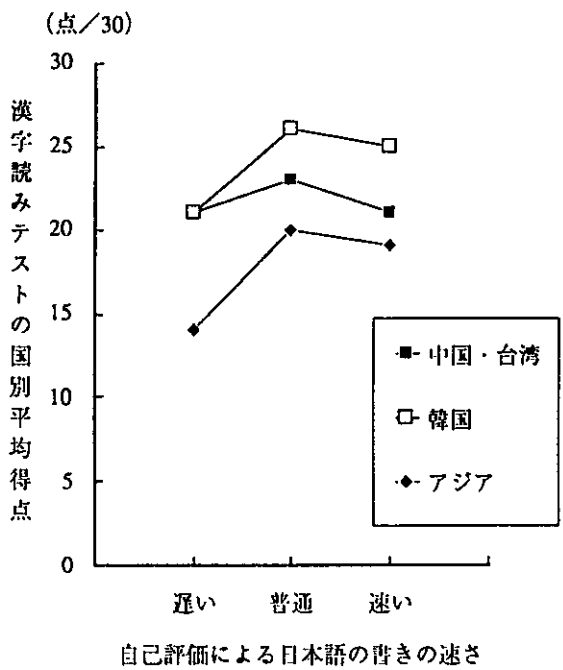
「読み」「書き」についても同様に「中国・台湾」グループが、日本語の「読み」や「書き」の速度に対して、日本語の漢字力テストの得点数の差とは関係ない自己評価が出た。これは、まだ日本語の学力がついていなくても速く読んだり書いたりできるという自負心がのある反面、ある程度日本語の学力がついてもあまり速く読んだり書いたりできないというどこか不安な心情を吐露していると思われる。特に「読み」の速度に関する回答（図－2参照）では、「速い」と答えた学習者と「普通」と答えた学習者と「遅い」と答えた学習者の平均得点数が全く同じという現象は「中国・

表－6　母国語と日本語の読みの速さと漢字力テストの平均の分布

		日本語で読むのが速いか 速い	普通	遅い	
母国語で読むのが速いか	速い	27 23.1%	33 28.2%	32 27.3%	92(21点) 78.6%
	普通	2 1.7%	9 7.7%	9 7.7%	20(22点) 17.1%
	遅い	0 0.0%	2 1.7%	3 2.5%	5(22点) 4.2%
		29 (23点) 24.7%	44 (22点) 37.6%	44 (19点) 37.6%	

表－7　母国語と日本語の読みの速さと漢字力テストの平均の分布

		日本語で読むのが速いか 速い	普通	遅い	
母国語で読むのが速いか	速い	13 11.1%	21 17.9%	41 35.0%	75(21点) 64.1%
	普通	0 0.0%	9 7.6%	19 16.2%	28(21点) 23.9%
	遅い	0 0.0%	5 4.2%	9 7.6%	14(24点) 11.9%
		13 (22点) 11.1%	35 (23点) 29.9%	69 (20点) 58.9%	



図－3　日本語の書きの速度の自己評価群の平均点

台湾」グループならではの回答である。

これらの分析を総合すると、学習者の自己評価から、自立学習のための総合的体系的学習指導には、次のようなことも必要であることが分かった。

1.漢字力の上下の区別なく、上位者には上位者なりの下位者に下位者なりの指導が求められており、レベルに応じた指導が自立を促すことになること

2.学習漢字を運用する場として作文などの学習者が苦手な「書き」を漢字指導と結合させることが自立を円滑にすること

3.「中国・台湾」グループの自立学習にあたっては、その自信と不安に対して情意面での配慮が必要であること

注

1）Joan Rubin は、「一度訓練された学習者は、学習項目に対してどう取り組むかの最高の判断者になる」という仮説をたてている。（参考文献１）

参考文献

1. Wenden, Anita and Rubin, Joan (1987) *Learner Strategies in Lanbuage Learning* Prentice-Hall International.
2. Wenden, Anita (1991) *Learner Strategies for Learner Autonomy* Prentice-Hall International.
3. Legutke, Michael and Thomas, Howard (1991) *Process and Experience in the Language Classroom* Longman.
4. James, Carl and Garrett, Peter (1991) *Language Awareness in the Classroom* Longman.
5. 清水百合・加納千恵子(1992)「ＣＡＩを利用した漢字学習－授業における漢字学習と自学自習のメカニズム－」『日本語教育78号』
6. 清水百合(1992)「初級漢字クラスの問題点－漢字圏学習者を中心に－」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第８号